

Latina

MUSICA CONTEMPORANEA DEL MUNDO

ラティーナ 世界の音楽情報誌
www.latina.co.jp

2002 NOVEMBRE

11

昭和40年3月30日第三種郵便物認可
平成14年11月1日発行(毎月1回1日発行)通巻585号

ピアノを奏でる、フアンホ・ドミンゲス
カティア・ゲレイロ『至上のファド』
特集:アルタン祭り2002出演者インタビュー
“Shima Uta”の旅は果てしなく続いていく
ブルガリアン・ジプシー
セバスチアン・サルガド写真展
最良の時を迎えたサリフ・ケイタ
女流フルート奏者、深津純子
我如古より子&吉川忠英『唄遊び』
ウェザー・リポートと
ワールド・ミュージック
DVD『カジェ54』
フェルナンド・アルバレス
を偲んで



Irish&Celtic Music Festival

Elis Andreote / Demas Vecchiare

舞台進行は今まで何度か見てきたステージと基本的になんら変わるものではなかった。リードヴォーカルのジャン・フランソワ・ベルナルディの「一動、歌と歌の合間にはさむコメントもきちんと読書通りに運ぶ。1分たりとも隙のない完璧なエンターティナーだ。



パリ・オランピア公演 (9/19) より

「サン大賞の新人賞とプロデューサー賞を獲得したアラディン。フライングVがうなるヘヴィなロックに、ラップを挟み込んだ楽曲を得意とするバンドだ。シーサン大賞はポップ&ロックのアルバムのカオリティのみを基準にしている音楽賞であり、所属先の規模にはもちろん無関係だ。しかしタイでは弱小のワーナー所属で無名だった彼らにとって、格別な受賞だったにちがいない。だが商売としては当然アルバム売り上げがものをいう。その結果メンバーのうち2人が脱退、今作「Jump」では新メンバーが加わり、ボーカル2人にギター、ベース、ドラムスという編成だ。沈黙の期間はメンバーそれぞれがライブ演奏をして、コンピューターの勉強をして過ごしてきた。



アラディンの新作「Jump」より

前半部は、イ・ムヴリニのスタンダード・ナンバーでかためた。おなじみの「ドゥマンダ」や「ア・ヴォーチエ・リヴォルタ」では会場のあちこちでコルシカの旗が揺れ、聴衆の大合唱となった。いよいよ後半部に入って新譜の披露となった。前作の「フィールド・オブ・ゴールド」を引き継ぐ形のサウンドだ。その中でちょっと異質なアフガニスタン・スタイルを装った「ジャララバ」の軽快なメロディーが耳に残った。

タイ短信

(文・写真 by Kazuko Ueno)

主流から離れてみると…
プロモーションに金をかけ、華々しくデビューする歌手やバンドを度目、ビッグなセールスにはつながらないながらも、自分たちの音楽の信念を守っている若きアーティストを2組紹介しよう。ともに今作が2作目に当たる。まずは、3年前のデビュー作で、シ

ン作では前作「アラディン」と基本的に異なるコンセプトは変わらず、ロック&ラップを劇的な楽曲のなかで賣いている。前作より重厚な楽曲には関心させられるのだが、やはりタイのバンドが、10曲中3曲が工夫のないバラードで、それまで保ち続けた緊張感が揺らぐ。2トップのボーカルが歌う歌詞には、流行語を生みそうなしやれた意味合いの言葉が含まれているばかりにとても惜しい。それでもライブを見てみたいと思わせる、勢いのあるバンドである。次は、タイでは珍しいファンクを聴

かせるバンド、「Soul After Six」の3人である。ライブ・ハウスをくまなく探せば、この種のバンドはいくつか見つかりそうだが、彼らが勝負するのはオリジナル曲。うまいコピー・バンドより多少複雑な演奏でも、オリジナルを引下げたバンドを応援したい。デビューは96年。タイではロックについていけなくなった層がブラコン風の音楽を聴きはじめた時期である。彼らが所属するベーカーリー・ミュージックの創設者のひとり、ボーイ・コーシヤボンがつくるタイ語による涼し気な曲調が大人のリスナーに好評だった。しかし、ファンクはハード過ぎ、タイの市場にそぐわないとラジオ局のDJに言われたそう。タイでも70年代にバンド・ブームがあり、その初期の音を聴くと、ロック以上にR&Bの影響を感じるのだが、それ以降フランスの音で前面に出したグループが主流のシーンに登場していない。特に外国音楽を聴きまくるマニアでなく、一般のタイのリスナーにとっては、耳慣れないタイの音楽なのだ。



Soul After Six の2作目「The Rhythm」より

タイ語の歌詞をつけるのに手間取ったらしい。タイ語には声調があるから、次の語を連発するのに束縛がある。彼らの2作目「The Rhythm」は、未だに完成した形が見えない試行錯誤のタイのファンクを聴くことができる。(以上、by Satoshi Sakai) **ブラジリアン・ジャズ・ニュース**
ジャネット・ジャクソンやクリス・モンタン、トーマス・ニューマン、フイル・コリンズなど超大物アーティストが集った、レコーディング・アカデミー(米グラミー賞を運営しているアカデミー)会員式典に、タイ人ではただ一人の現役正式会員として出席、口ス滞在中にはブラジル出身の名ギタリスト、オスカー・カストロ・ネビスらに招かれリハーサルに同席、他ポルトガルやキューバなど世界中を飛び回っていたタイで唯一の女性ジャズ・ギタリストでブラジリアン・ジャズ・ミュージシャン、Dr. ka TEEが、年末に向けてタイ国内での活動を再開している。



左からチャーリー・ビシャット(Ch), ドン・グリーソン, Dr. ka TEE, オスカー・カストロ・ネビス

最後の週の日曜日、ロビー・ラウレンジに再びボサノヴァのやさしい調べが響き渡る。10月26日にはネオン・キラキラ若者の街、ロイヤル・シティー・アベニュー(RCA)のオーバートーンでアコースティックなブラジリアン・ジャズ・ライブ、続いて10月28日にはダイハードな音楽の愛好者が集まるソムタウ・スチャリッコン・バーフォーミング・アーティストで前代未聞のジャズ・コンサート開催。11月2日、3日にはインベリアル・ラドブラオで行われる、インディーズ・アーティストの祭典。フット・フェスティバルに参加。ここでは、Dr. ka TEEを含めたミュージシャン12人の曲が取められているインディーズ・レーベル「スモールルーム003」が「ニューカラー」がリリースされる。
そして、11月5日には、タイではグラミー賞に値するシーズン・アワード受賞歴もあるR&B系若者バンド、ソウル・アフター・シックスのコンサートにスペシャルゲストとして出演。ちなみにこの、ソウル・アフター・シックスのコンサートは、なぜかこれが最初で最後の「一回きりのコンサート」だそう。この機会を逃すと後がないらしい。
その他、Dr. ka TEEが総司会者を務めることが決まっているデンマーク大使館主催のジャズ・ワークショップには、ラテンビートのアルバム「ジャズ・アンド・マンボ」がジャズ・アルバム・オブ・ザ・イヤーを受賞したデンマークのサクソフォン奏者ハンス・ウーリックや、香港の有名ジャズ・ミュージシャンたちが招かれており、Q&Aコーナーやジャムセッションなど贅沢なプログラムが予定されている。(by Marisa Osawa)